

Muse

帝国データバンク史料館だより【ミューズ】

2009.07
VOL.09
TDB Historical Museum



古往今来〈特別論談〉

商社に見る 恐慌時代の取引先管理

高千穂大学 経営学部教授 大島久幸さん

TDB交親録 ゆかりの人物 ― 交流と親交の記録
角界の大久保彦左「彦山光三」

日本の産業創世記
日本特有の製法と不断の改革 [塩製造業]

シリーズ：史料との対話
激動の昭和を支えた 第二帝興ビル

関東大震災の約3年後、鉄筋コンクリート造の新しい本社ビルが竣工した。帝国興信所は、ここを拠点に激動の昭和を迎えることになる

特別論談

商社に見る 恐慌時代の 取引先管理



高千穂大学 経営学部教授

大島 久幸さん [おおしま ひさゆき]

専修大学経営学部卒、同大学院経営学研究科修士課程修了、同博士課程修了。経営学博士。現在、高千穂大学経営学部教授。専門は総合商社史、海運史。著書に『商品流通の近代史』『流通システムの国際比較史』（何れも共著）などがある

1

1920年代の時代背景

今日の経営環境は20～30年代の
金融・世界恐慌時代に類似している

百年に一度の経済危機という見方が広
がるにつれて、1930（昭和5）年代の
大恐慌への関心が内外で高まっています。
日本では世界恐慌の一環として起こった昭
和恐慌に言及される機会も増加している
ように見えます。10年代後半、日本は第
一次世界大戦期におけるヨーロッパ諸国の輸

出余力の喪失やアジア市場の拡大によっ
て、15年頃から大戦ブームと呼ばれる未
曽有の好景気を迎えます。この大戦ブー
ムでは「成金の時代」とも呼ばれるように
虚業家の台頭と相まって株式市場などで
投機的取引が横行し、投機が投機を呼ぶ
バブル経済が生じます。そうしたブームは
第一次世界大戦終結後、一時的な沈静期を
経て、19年にかけてより激しさを増してい
きました。しかし、大戦バブルは20年3月
の東京株式相場の大暴落を契機に全国
的な恐慌へと発展していきます。

この20年恐慌によって、とりわけ商社が
大きなダメージを受けました。古河財閥が
新たに創設した古河商事が「大連事件」と
呼ばれる投機取引の失敗で破綻したほか、
大戦期に横浜を拠点に総合商社へと事業
の拡張を図った茂木家は、総損失1億円
といわれる損失を発生させて破綻します。
砂糖取引商からスタートした増田屋商店
も1,000万円以上の損失を発生させ

て整理されるこ
ととなり、増田
屋商店と関係の
深かった安部幸
商店も、増田に
比してその損失

は軽微であった
とされるものの、
20年恐慌で事業
の清算を余儀な
くされました。

そのほか、大

戦期に久原鉱業から商事部門を独立させ
て事業を拡張した久原商事の損失は、
6,000万円に達して個人資産を以て
してもその不足は補えず、浅野物産も
600万円の損失によって改組を余儀な
くされ、湯浅も使用人の3分の2を解雇
する徹底的整理に追い込まれます。関西
に拠点を置く商社も例外ではなく、伊藤
忠商事は一時、資産500～600万円
に達したが、「差引零二近」になったほか、
江商は3,000万円近く、日綿は1,
000万円以上といわれる損失を生じさ
せることとなりました。

この20年恐慌の後、29年に始まる世界
恐慌までの10年間、日本企業の経営は大
きく傾き、不振にあえぐこととなります。
実は、20年代には都市化や電力化、消費
需要の変化などによって新しい需要も生
まれており、実質成長率は世界的にも高
水準でした。しかし、他方で、大戦ブームで
急成長した産業分野を中心に業績の不
振が続く、それら企業の不振が、関係の深
い銀行の破綻・倒産を引き起こし企業の
経営に重苦しい雰囲気をもたらしていま
した。また、23年には、関東大震災によつて
さらに企業の不振に拍車をかけることと
なります。

こうした繰り返される企業経営と中小
銀行の動揺・破綻を前に、政府は財界整
理を進めることとなるのですが、その矢先
に27年には銀行への取り付けが大規模に
発生する金融恐慌が起きます。特に大戦
期に巨大商社にのし上がった鈴木商店の
破綻を契機として台湾銀行が休業すると、

第2次世界大戦期に、アメリカやオース
トラリアで日本の資産が接収された。そ
の中には、商社を中心とした企業の史料
が含まれている。近年、これらの史料の研
究が進む中で、商社の取引先の与信管理
資料も発見されている。
商社は1920年代からの恐慌に際し、
多くの企業が破綻した。この時代の経営
環境は現在と類似している。20年代から
30年代の苦難の時代に、商社は破綻回避
のためにどのような手を打っていたのか。
接収史料からその様子を窺い知ることが
できる。総合商社研究の一環として、これ
ら接収資料の調査を進める大島久幸・高
千穂大学経営学部教授に語ってもらった。



取り付けは大規模なものへと発展していきます。その後、政府は財界整理を進め、企業体力の強化を図ろうとしますが、その政策を進める過程で、29年10月にニューヨークの株式相場の大暴落をきっかけに世界恐慌が発生し、緊縮政策をとっていた日本は悪化する世界経済の影響を受けて深刻な恐慌状態を呈することになっていったのです。

条件としてはいくつも違いがあるわけですが、バブルの崩壊から金融危機、世界恐慌というこれら20年代から30年代にかけての一連の流れは、今日の企業経営がおかれた環境と類似性があるのも確かです。

2 商社のリスク管理

大手商社は取引先を精査し 与信管理の仕組みを構築

こうした20年恐慌以後の環境変化の中で、商社の経営にとって極めて大きな課題となったのが取引先の信用不安に対する対応です。例えば、代表的総合商社であった三井物産の場合、不良債権である滞賃金の額は1916（大正5）年下期に92万円であったものが、21年下期には376万円に増加し、22年には常務から各支店長宛に固定債券の整理の通達が出されたこともあってその規模は膨らみ、22年上期に164万円、同下期には1,346万円という巨額に達します。当時の常務の手紙には、商売の方は漸次堅調

となってきたにもかかわらず、固定債権の整理が進まない状況を憂慮する内容がつづられています。取引先の信用不安に伴う固定債権の増加が大きな経営上の課題となっていたのです。他方、20年恐慌を乗り越えた三菱商事の場合も同様で、20年代にかけて取引先の破綻に伴う債権整理が度々問題となり、役員の処分などが行われていくことになります。

このような20年代の時代状況の中で、商社は取引先の信用を精査し、コントロールするための制度を整えていくことになりました。三菱商事では、25年になると新たに取引先の信用限度制度や取引残高制限などを定めていくことになりました。三井物産でも24年には、規則を改正して新たに買付先に対しても信用程度（信用限度）を設定するとともに、売買約定残高に対しても最高限度を定めて、その管理の範囲を拡大するとともに、取引先信用に関する制度を強化していくことになりました。これらの制度は、現場である支店からの申請に基づき、本店が取引先ごとの信用を精査して、取引先の破綻に伴う



金融恐慌関連記事「帝国興信日報」
1927年3月15日、東京渡邊銀行と傍系のあかち貯蓄銀行が突如として臨時休業に追い込まれたのをきっかけとして金融不安が広がり、全国規模の取り付け騒ぎが勃発した。この金融恐慌に関する記事を帝国興信所の経済情報紙「帝国興信日報」は連日のように報じていた

3 信用調査会社の利用

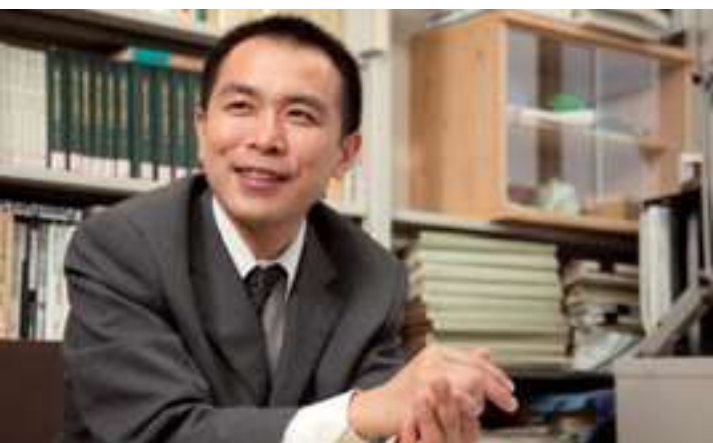
求められた信用調査会社の情報 情報の質の差が、競争力の差に

リスクをコントロールしようというものでした。そして、これらリミットのあり方を景況に応じて変化させながら、リスクに対応しうる体制を整えていったのです。

こうした取引先信用に関する制度を整備する上で、重要な役割を果たしたのが、世界各地の信用調査会社です。商社は、例えば新規の取引先を開拓する際などに会社の概況や資産状況、経営者の性格などのレポートを調査会社から受け取って、それらをもとに本店にリミットを申請します。本店の方でも積極的に世界各地からの興信所の報告書を送るように指示しています。

ただし、信用調査機関の情報自体は、お金で買うものであり、企業にとって差別化をもたらしません。基本的には現場は新し

い取引先の開拓など事業の拡張を望むのに対して、本店側はその引き締めにかかります。現場は、そうした信用調査会社から得られた一般的な信用に関するデータ以外にも、取引先銀行に調査したり、取引先との対話の中で事業の将来性を汲み取ったりして、何とか本店の枠をもちょうと情報の高めていきます。一方で本店側も、マクロの経済環境が大きく変わったときには一斉に現場のリミットを再構築させるなど全体的見地からマネジメントしていきます。リスク回避的な行動ばかりとていでは、事業は拡張しないわけで、こうした20年代に繰り広げられる本店と現場のせめぎあいの中で、企業ごとに取引先信用に関する情報の質に差が生まれ、それらが企業の競争力の差を生んでいったと考えます。



誰よりも相撲を愛し、常に辛口の土俵批評で相撲の理想を追い続けた希代の相撲評論家・彦山光三。

その基礎は帝国データバンク創業者・後藤武夫が主宰していた思想結社「日本魂社」の機関誌『日本魂』の記者時代に築かれた。精神的な編集・出版活動を経て、大日本相撲協会嘱託に転身。今日に続く大相撲の歴史のなかにも、相撲界の権威と言われた彦山光三の名前が残っている。

幼少の頃からの相撲狂 26歳で『日本魂』の相撲記者に

1965（昭和40）年、大相撲3月場所を真近に控えた3月9日、この年の1月場所から「部屋別総当り制」が実施されたのを見届けるように、ひとりの相撲評論家がこの世を去った。「角界の大久保彦左」と異名をとった彦山光三である。

「部屋別総当り制」では、他の部屋のどの力士とも取組みがあるが、それまでの「二門系統別総当り」では、一門を超えての取組みが少なく、取組みがマンネリ化していた。彦山はこの他にも、「行司部屋の独立」や「写真判定」の導入など土俵の充実と厳正

な判定を求めて、大日本相撲協会（当時）に対し改革を訴え続けていた。

彦山光三は1893（明治26）年、静岡県清水市に生まれた。幼少のころから相撲狂で、小学校の帰りはいつも草むらで相撲をとっていた。また、いたずらも激しく、9歳の時には寺に子坊主修行に出された。12歳になって、とうとう修行に耐えきれず逃げ出してしまふ。その後は上京して東京の中学を転々とするが、早稲田大学に入学。しかし、20歳で中退して帰郷し、地元で代用教員となった。祭りの際の土俵作りや草相撲の技術的な講釈で村人を煙にまくなど、この頃から相撲の知識は相当のものだったようだ。

3年ほどで再び上京し1919（大正8）年4月頃、26歳の時に『日本魂』の記者として帝国興信所に入社した。

相撲関連の編集・出版を担当 彦山にとって相撲は真剣勝負

在職中の1924（大正13）年から28（昭和3）年の約4年半、やはり『日本魂』記者として在職した作家・山本周五郎とは同僚として親交があった。彦山は周五郎の代表

作のひとつ「青べか日記」に、次のようにしばしば「ヒ」として登場している。

「昨夜は代々木の『ヒ』の家に泊まった。末子がいた」

末子とは、彦山の夫人の妹で、周五郎は末子に熱烈な思いを寄せたのだが、この恋はついに実らなかった。

さて、『日本魂』は、「国技相撲道は即武士道であり日本魂である」という立場から、積極的に相撲を誌面に取り上げた。

28年5月号では、相撲号と題して全編で相撲特集を組んだ。特集の巻頭言は、後藤武夫の「相撲道興隆の急務（主張）」であった。武夫は常々、相撲道の振興によって、国民精神の作興を図り、社会風教に寄与するとし、また、相撲の精神・肉体両面からの教育的意義を唱えていた。巻頭言に続いて、彦山も「火子山彪」というペンネームで「本朝相撲発生史略」を執筆している。国技相撲を源流から解説し、国技館での競技にとどまらず、子供から大人まで広く一般にも普及させるべきとの相撲維新を唱えている。

30年5月には、『相撲道宝鑑』と題した単行本も発行した。「天覧編」「指針編」「奨道編」「史伝編」「戦績編」、さらには「芸談



『相撲道宝鑑』（1930年5月号）日本魂社が発行した単行本。相撲の普及と発展を目的に編集されたもので、彦山光三は「朝潮と武蔵山」と題した評論を執筆した

編」「読物編」と、およそ相撲にまつわるあらゆるジャンルをカバーした全216ページの大作で、彦山が記した巻末の編集後記には

「前刊『相撲道大鑑』において相撲の歴史的意義を解明し、その教育的価値を高揚して、相撲道の振興を絶叫した我等は、本書においては主として、相撲道の普及と発展に資すべく、実際問題により多くの力を集注した」

とある。この宝鑑の戦績編で彦山は「朝潮と武蔵山」を執筆しており、この中に後の相撲評論家・彦山光三の相撲眼が見て取れる。

「武蔵は強烈に突掛ける所存か、土俵まで離れて仕切った。左足は徳俵にかかっていた。いかに烈しく打突つても相手はいなしたり、ひっかけたりする力士ではない。仕切り直し七八回の後、武蔵は俵を蹴って突進した。雲を呼び風をおこすの白兵戦は、ここに開始されたのだ。（略）この戦こそ真の肉弾戦と言うべく、区々たる技術の如きはかかる大力量になると全く問題ではない。勝敗の如きまた敢えて問うところでない。こうなると勝敗はただ名のみである。両者ともに戦いつくした。遺憾はあるまい。未練はあるまい。観衆ごとく満足しラジオにより新

角界の大久保彦左 彦山光三

雑誌『日本魂』の記者を経て
希代の相撲評論、土俵批評家に。



写真提供：毎日新聞社



彦山光三の著作『土俵場規範』『相撲鑑賞読本』(1935年)。
『日本魂』記者を退職後、彦山光三は雑誌『相撲』の編集の傍ら、精力的に著作活動を行った

間により、ファンまた「ごく」堪能した」
彦山にとって相撲とは、必死に肉弾合い
打つ真剣勝負であったのだ。

廃刊に際し大日本相撲協会に転身 さまざま評論活動を開始

『日本魂』の相撲に係る編集や出版は彦
山が担当していた。この雑誌を主宰してい
た後藤武夫は国技相撲に傾倒しており、ま
た、力士のタニマチとしても相撲界を支援
していた。

しかし、1933(昭和8)年2月、武夫
は逝去し、翌34年9月に『日本魂』は廃刊
となった。彦山は編集部副長を務めていた
が、廃刊3カ月前の6月に退職している。

退職後、彦山は大日本相撲協会に転じ、
出版部嘱託として、雑誌『相撲』の編集に
携わった。この年、早くも雑誌『中央公論』
に「出羽ノ海伝」を発表し、相撲評論家と
しての活動も始まった。

『相撲往来』(35年)、『土俵場規範』、『相
撲鑑賞読本』(以上、38年)、『相撲道総鑑』
(40年)、『相撲美開眼』(41年)と、著作活
動も精力的に行なった。その後は、大日本相
撲協会の私設顧問、相撲文化研究所長、
読売新聞嘱託を歴任した。

彦山が希代の相撲評論家であったこと
を示すふたつのエピソードがある。

横綱の土俵入りには「雲龍型」と「不知火
型」がある。現在では、朝青龍が雲龍型、白
鵬が不知火型だ。雲龍型は、第20代横綱二
代梅ヶ谷が完成させた型で、せり上がると
きに右腕を伸ばし、左手を胸のあたりに添
える。不知火型は、両腕を左右に伸ばして
せり上がる型だ。「相撲評論家之頁」主宰者
で相撲の歴史に詳しい坪田敦緒氏によると、
「昭和16年に羽黒山が横綱になった折、
第22代横綱太刀山の型を採用した。見慣
れない型ゆえ誰の型かということになった
が、ここで彦山光三氏が『不知火型』と言っ
たことで、当時は斯界の権威であった彦山
氏の言ですから、すぐに定着したというこ
とようです」

彦山の根拠は歌川国貞が描いた第8代
横綱不知火諾右衛門の錦絵であった。

もうひとつ、終戦直後に大相撲が存続の
危機にあったとき、彦山の名前が登場する。
大日本相撲協会はそれまで、「日本精神は
土俵精神、大東亜共栄圏に相撲は欠かせ
ない」と宣伝しており、GHQに相撲興行の
継続を認めさせる対策が必要となった。従
来、本場所前の「土俵祭」では立行司が祝
詞を読み上げ、12の神々を土俵に迎えてい
た。GHQ対策のひとつとして、これらの神



第8代横綱不知火諾右衛門(歌川国貞) 横綱羽黒山の土俵入りの
型を、彦山光三は不知火諾右衛門の錦絵を根拠として、「不知火型」とし、この
呼び方が定着した

を三神に減らしたのだが、この三神は彦山
と立行司・第22代木村庄之助が相談して
決めたのだという。

相撲を愛し、理想像を追い求め 眼光鋭く土俵批評を展開

戦後、彦山はその鋭い土俵批評により、
土俵の充実を訴え続けた。角界の
大久保彦左と言われる所以であ
る。

1958(昭和33)年、『漫画読
本』8月号では「相撲会を叱咤する
彦左精神」と題して、また、翌年の
『週刊読売』4月号では「彦山光三
の眼光」と題して、彦山の八百長相
撲糾弾の姿勢が紹介されている。心
情であれ、武士道であれ、ましてや
星の貸し借りなどは言語道断。気



引退相撲 帝国興信所初代所長・後藤武夫、二代目所
長・後藤勇夫はタニマチとしても相撲界を支援した。この写真は
勇夫がタニマチであった大和錦(左)、十三錦(中)、一渡
(右)の引退相撲でのひとコマ(1944年1月、旧両国国技館)

を抜くことを許さず、すべての取組みに真剣
勝負を求め、「部屋別総当り制」「行事部屋
の独立」「行司は各相撲部屋に所属してい
た」など、改革案を協会に投げかけた。
行司部屋の独立は58年に(73年に再び
相撲部屋の所属に)、部屋別総当り制は65
年に実現し、今日にいたっている。
65年3月10日の『報知新聞』によると、
当時NHKの大相撲解説者だった玉の海梅
吉氏は彦山の死に際し次のように語った。
「彦山さんはほんとうに私心をはなれ、
相撲に愛情と情熱を傾けた人である。相
撲はかくあるべきだ、という理想像をいつ
も胸のなかに描き続けた」
時の大横綱大鵬も
「いつもけなされ通しで、腹のたつことが多
かったが、よく考えればそのために発奮も
したし、いい勉強になった。今にして思えば、
大変ありがたかったと思う」
と、彦山を偲んでいる。

彦山は相撲評論を始めてから30余年、
肺炎で高熱を出したとき以外、1日も土
俵観戦を、欠場したことはなかったという。

塩製造業

日本特有の製法と不断の改革

岩塩などの資源がなく多湿多雨の日本では、古来より海水を濃縮してから煮詰める独自の製塩法を採ってきた。かつて塩田で作られていた塩は今では近代的な装置産業となったが約1世紀続いた専売制度のもとで改革が続いた独自の産業でもあった。

「大日本物産図会 赤穂塩浜の図」三代歌川広重(明治10年)
赤穂市立歴史博物館蔵



写真提供：たばこと塩の博物館

入浜式塩田の作業風景 1600年代に赤穂で始まった入浜式塩田は、瀬戸内海沿岸地域に広がり、昭和30年頃まで約400年間も日本の製塩の主力だった

しかし、日本には「岩塩」や「湖塩」といった資源はなく、また、年間降水量も世界平均の2倍と多く、高湿多雨な気象条件から「天日製塩」も行えない。そこで古代より、海水の水分を燃料を使わずに蒸発させて濃い塩水(かん水)を事前に作っておく「採かん行程」と、かん水を燃料により煮つめて塩の結晶を得る「せんこう行程」というふたつの工程による独自の製塩法が発達し、現在の近代的な製塩法にも引き継がれている。

世界の塩は「岩塩」「湖塩」「天日製塩」
日本は独自の「採かん・せんこう法」

塩がなければ人類は生きていけない。体内で消化を助け、細胞を保ち、刺激の伝達も担っている。冷蔵庫がない時代には食料の保存に欠かせず、また、醤油や味噌などの調味料にも塩は必需品で、まさに「生命の糧」とも言うべき働きをしており、塩づくりは人類の歴史とともに始まったと言われている。

外国では、内陸地に結晶・堆積した「岩塩」や、陸に閉じ込められた海水が岩塩に変化する途中の「湖塩」を採取したり、海水を天日だけで蒸発させる「天日製塩」という製法で製塩が行われている。

「藻塩焼き」から「塩浜」「塩田」へ
現代は近代的な化学工業に

「来ぬ人を まつほの浦の タナギに
焼くや 藻塩の 身もこがれつ」

『小倉百人一首』の第97番目に収められた藤原定家の歌である。ここに詠まれた「藻塩焼き」が、日本の古代の製塩法と言われている。古くは海藻を焼いて灰塩をつくっていたが、やがて灰塩に海水を注いだり、干した海藻に海水をかけて、かん水を得たとされている。

8世紀には、塩分が付着した砂が利用されるようになり、9世紀には人工的に手を加えた塩づくり専用の「塩浜」が形成されてくる。この塩浜は海水を引き込む方法により、「揚浜」と「入浜」に大別される。

「揚浜」とは人力で海水を汲み上げて砂浜に撒くもので、潮の干満差が小さい日本海側や、波が荒い太平洋側で発達した。能登半島の珠州市には石川県の無形文化財として国内で唯一の昔ながらの揚浜が存続している。

一方、干満差が大きく干潟の発達した場所では、干満による水位差を利用して自然の砂浜に海水を引き込む「古式入浜」方式が採用された。この自然浜には次第に堤防や海水溝などがつくられ、より大規模で効率的な「入浜式塩田」へと発達する。

1645(天保2)年、浅野長直が常陸国から赤穂に転封し、赤穂藩が浅野時代を迎えると、古式入浜は入浜式塩田へと改造され、大規模な干拓もおこなわれた。この合理的で高品質な技法は瞬く間に瀬戸内海沿



写真上：赤穂の東浜(右)・西浜(左)塩田絵図 東浜塩田は浅野時代に開発・干拓され、その広さは約150haあった。次の森時代には西浜の開発が進み、広さは約250ha。赤穂は東西合わせて約400haもの入浜式塩田を誇った(赤穂市立歴史博物館所蔵)
写真下：現在の東浜跡地 広大な塩田跡地は「兵庫県立赤穂海浜公園」となり、塩田を再現した「塩の国」、遊園地や「海洋科学館」、テニスコートなどの施設がある。なお、西浜跡地は住宅地や工業団地が広がり、ここで日本海水株式会社赤穂工場がイオン交換膜法による製塩を行っている(写真提供：財団法人兵庫県園芸・公園協会赤穂海浜公園管理事務所)



十州塩田
この地域で日本の塩の80～90%を賄った

岸各地に伝播し、この地域の10カ国の塩田は「十州塩田」と呼ばれる一大製塩地帯となつて、元禄年間(1688～1704)以降は日本の塩の80～90%を賄った。

入浜式塩田は1959(昭和34)

年頃まで約400年も続いたが、「流下式塩田」に転換される。この方式は砂を媒介せず、ゆるやかな斜面に海水を流す間に水分を蒸発させ、さらに、何段にも組まれた竹の枝を伝って滴らせながら風力によっても水分を蒸発させるというもので、労力は10分の1、生産量は2.5～3倍へと増加した。

さらに、72年以降、製塩はイオン交換膜法により、塩田を必要とせず、天候に左右されない近代工業に生まれ変わった。電極とイオ

ン交換膜により、ナトリウムイオン(Na^+)と塩化物イオン(Cl^-)をこし取って濃縮塩水(かん水)を得、真空式蒸発缶で効率的にせんごうする方式が登場したこと、塩田はすべて姿を消した。

専売体制のもとでリストラ断行 高品質、低コスト、供給体制を整備

明治以降、日本の塩づくりの歴史は合理化とリストラの歴史であった。国産塩は高品質の「真塩(ましお)」と塩化ナトリウムの純度が低い「差塩(さしお)」の2種類があったが、差塩が大半を占めていた。開国後は品質面でも価格面でも外国産への危機感が高まり、技術、コストの両面から国内塩業の育成と保護が急務となっていた。

こうしたなかで、1905(明治38)年、明治政府は塩の専売制度を実施した。当初の目的は、国内塩業の基盤整備と日露戦争の戦費調達であったと言いが、「たばこと塩

の博物館」の高梨浩樹学芸員は、「専売制度の主目的は、実際には国内製塩業者の保護・育成と消費者保護にあったのではない」と話す。事実、生活必需品である塩は安価・安定供給が必要であることから、19(大正8)年には収益主義から公益専売へと転換されている。

この専売制度のもとで、国は4次にわたる製塩業の整備、すなわちリストラチャリングを断行してきた。

●第1次塩業整備(1910～1911)
生産性の低い塩田の廃止などで価格を引き下げ(13,400人の製造者と1,800haの塩田を整理)

●第2次塩業整備(1929～1930)
国内や台湾、関東州からの供給力が増え、これらの供給過剰を解消(6000人の製造者と1,200haの塩田を整理)

●第3次塩業整備(1959～1960)
流下式塩田への転換など技術革新による供給過剰を解消(2,000haの塩田を整理)

●第4次塩業整備(1972)
製塩法をすべてイオン交換膜法に転換(2,200haの塩田を整理。塩田消滅)

【参考】財団法人塩事業センター」

4社体制で食用塩自給率100% 専売制度の廃止により完全自由化

第4次塩業整備により、日本の製塩業は装置産業化するとともに、7社7工場に集約された。その後の廃業と合併により、現在は4社6工場体制となっている。

この4社が製造する塩によつて食用塩の自給能力は100%であるが、国内の塩全体の需要から見れば15%である。その他の85%は工業用で、80%をソーダ工業用が占めている。工業用の塩はメキシコ、オーストラリアなどから輸入される天日塩が中心だ。

かつては、国産塩も輸入塩も専売であったが、1985(昭和60)年、日本たばこ産業(株式会社)への民営化を経て、97(平成9)年、92年間続いた専売制度は行政改革と規制緩和の流れの中で廃止され、塩の製造も販売も自由となった。この結果、近年は全国各地で「当地もの」「自然塩」などが作られるようになった。2002年には輸入も完全自由化した。

日本の塩製造業の最大の特徴は独自の製法と、現在では世界最高レベルの高品質と安全性にある。それは、海水以外に塩資源を持たない日本で、古代から製法を編み出し改良し、また専売制度のもとで強力な改革を断行してきた知恵と努力の結晶だと言える。



写真提供：たばこと塩の博物館

現在の製塩工場(真空式蒸発缶) イオン交換膜法により得られたかん水は、エネルギー効率を極限まで高めた多重効用の蒸発缶でせんごうされる

震災後の本社ビル跡地に 第二帝興ビル完成

1925（大正14）年1月1日の迎年式において帝国興信所の創業者・後藤武夫は次のように述べている。

「唯吾々の前途に横（た）はって居る一大問題は、我所の新築といふことであります。故に本大正14年は、全員一致して此の大問題の解決に大努力を致したいと考へます」

この時の帝国興信所は、関東大震災により本社ビルが全焼したことで、武夫の自宅跡地に建てられたバラックの仮社屋で営業していた。震災からの復興にあわせて、この仮社屋は6回にわたって増築されたが、事業が進展するにつれて、従業員が増えバラックでは手狭になっていた。

京橋区南八丁堀（現・中央区新富）にあった本社跡地に約60坪の敷地を増して、新しい本社ビルの建築に着手したのは25年の春のことである。移転直前の帝国興信所社内報『所報号外』では、次のような言葉で従業員に檄を飛ばしている。

「新築が出来上つて近く茲に移転執務する三百の東京本所々員は、特に既往を振り返へり自覚し、反省し、以て新らしき理想と、新らしき抱負と、新らしき決心とを以て之に臨む可く、今より其準備をなすの必要があるのであります」

関東大震災から約3年後の26年12月17

シリーズ | 史料との対話 |

激動の昭和を支えた 第二帝興ビル

1926（大正15）年、関東大震災で倒壊した本社ビルの跡地に、鉄筋コンクリート造の新社屋が建てられた。この建物は、2002（平成14）年に解体されるまで、さまざまな歴史を見続けてきた。

今回は、激動の昭和を支えたかつての帝国興信所の本社ビル「第二帝興ビル」にスポットをあてる。



至誠堂で開かれた応召軍人家族慰安会 総数200余名が出席し、奇術や女流漫才などの演劇が行われた

日、帝国興信所の新しい本社ビルは竣工した。「第二帝興ビル」と呼ばれる、この本社ビルの様式と構造は次の通りである。

様式：鉄筋コンクリートの構造と新材料の美とを基調とし、之に古代ローマネスク式並にルネッサンス式等の粹を採りて意匠したる新様式なり

構造：堅牢を主として特に耐震耐火に最善の意を用ふ即ち基礎工事に對しては絶対の堅牢を期し、内外壁、柱、梁、各階段、床段等は全部鉄筋コンクリートより成り、外部に面する窓は悉く鉄障子を嵌め込み、隣接家屋に面する部分は巻込シャッターを附し又は鉄網入硝子を用ふ

それまでの本社ビルが関東大震災で倒壊した経験を活かし、大地震や火災を考慮して設計された第二帝興ビルは、地上4

階、地下1階の鉄筋コンクリート造で建設された。当時の各階の区分は次の通りであった。

- 地下：印刷室、発送室、食堂、倉庫、汽罐室等
- 1階：玄関、ホール、応接室、活版室、宿直室、小使室等
- 2階：所長室、調査部、日報部、会計、和室、台所等
- 3階：文書部、外国部、人事部、代理部等
- 4階：会議室（至誠堂）、舞台等
- 屋上：運動場等

震災後の新富町周辺には、4階建以上の建物がほとんどなく、松竹

キネマ本社だった築地菊栄ビル（27年築、現・菊正宗酒造）と並んで目立つ存在であった。

当時、第二帝興ビルの屋上の南側からは、聖路加病院の十字架のついた塔や築地本願寺の建物が見えたという。また、四階の会議室は、武夫のモットーであり、今でも企業理念として掲げられている「至誠努力主義」から「至誠堂」と命名され、一角に武夫が主宰していた思想結社「日本魂社」の機関誌『日本魂』編集部が置かれた。約63坪あった至誠堂には、ステージが設けられ、講演や集会、演劇などを開催する際には、一般の人たちも訪れた。



1階のアーケード 列柱上には、幾何学的な半円アーチが連続してかかっていた



建物最上階のコーニス（軒蛇腹） ロマネスク風の小さなアーチが連続して施されている



アーチ付け根のメダリオン（円形浮彫）桜マークは徽章や什器備品にもデザインされていた

佐藤功一が設計した 第二帝興ビルと大隈講堂

第二帝興ビルの外観を見ると、まず1階部分の柱をアーチ状に結んだアーケードに目が奪われる。さらに、最上階のコーニス（軒蛇腹）や柱のアーチ付け根のメダリオン（円形浮彫）など印象的な意匠が施されている。この建築の特徴は、懐古的な古いものと近代的な新しいものを同時に共存させ、当時の流行スタイルに介在させることで、それを統一させている点である。建築設



写真提供：毎日新聞社
佐藤功一 教育家、建築家としてだけでなく、陶器や木彫、俳句などについての造詣も深かった

計は、工学博士の佐藤功一によるものであった。

佐藤は、早稲田大学建築学科の創設者であり、東京女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）や日本女子大学で女性に対する建築教育の端緒を開くなど日本の建築学黎明期において多くの功績を残した人物である。生涯で手掛けた設計は、233にも及び、中には日比谷公園内にある市政会館・日比谷公会堂（29年築）や数寄屋橋のマツダビル（34年築、現・銀座東芝ビル）、帝室林野局庁舎（37〜61年、戦後のホテル・テイト）など地域の中核を担った建物も多い。

第二帝興ビルを設計した時期の佐藤は、東京都の再建に際し、その天分を遺憾なく発揮し、まさに全盛期を迎えていた。この時期の代表作には、第二帝興ビルが完成した翌年に竣工した早稲田大学の大隈記念講堂が挙げられる。

この建物は、キャンパスの主軸を斜めにし、訪れた人が向かって正面を見たとき、鐘塔が視界に入るような構造で造られている。細かな部分に目を向けると、大壁面の多く



大隈記念講堂 早稲田大学の創立者、大隈重信を記念する事業の一環として建てられた講堂。2007年、国の重要文化財に指定されている

を独特のタイルで覆い、テラコッタ（装飾に用いる素焼きの陶器）で要所を抑えている。同じように、第二帝興ビルの仕上げにも、多くの部分で褐色タイルを張り詰めており、テラコッタ及び人造石をもって装飾されている。佐藤の手掛けた作品には、外部に塗壁を用いることは稀で、タイルやテラコッタを用いたものが多い。その特徴としては、古典的な構成と重厚な意匠などが挙げられている。

「永い年月を維持させようとする建物ならば、その建築材料を考慮すべきであって、かかる考えがなされた新建築でなければ決して社会文化の眞髓とはならない」（53年彰国社刊、田辺泰編『佐藤功一博士』より）

佐藤が残したとされる語録が示す通り、タイルやテラコッタでの装飾は、ルネッサンス期の古典的な建築様式に対する憧憬だけ、

ではなく、自然環境に対して劣化や変色が少なく、防火・防水性に優れた材料を選んだ結果ともいえる。建築の寿命にも重きを置いて設計された佐藤の傑作の一つとして、第二帝興ビルもまた、その意志を引き継いでいた。

復興のシンボルとして 激動の昭和を支えた拠点

第二帝興ビルは、大正から昭和に変わるちょうど1週間前に竣工した。帝国興信所はここを拠点に激動の昭和を迎えることになる。年号が変わった翌年の1927（昭和2）年には、金融恐慌が発生し、29年には世界恐慌に襲われるなど、日本経済は深刻な不況にあえいでいた。この厳しい状況下にあつて帝国興信所では、事業領域の拡大や出版事業の強化が図られた。地下の印刷室に導入された最新式輪転機により印刷能力は増大し、出版部では『帝国興信日報』（現・『帝国タイムス』）の紙面の充実化や即日配信も実現することになった。しかし、この『帝国興信日報』は41年、戦時体制下の用紙統制により休刊に追い込まれ、基幹の信用調査も激減していく。戦時中に帝国興信所は、国内外あわせて54力所の事業所を失ったが、幸運にも第二帝興ビルは空襲を免れた。ここを拠点としてさまざまな復興に向けた活動が再開される。事業所の復興・再建が進められる中、出版物の復刊、創刊など事業体制の整備も進んでいた。

戦後復興の過程の中で近代化の動きも



帝国興信所のロックアウト 1956年、会社側と労働組合側の関係が紛糾し、事態はロックアウトにまで進展した。写真は、ロックアウトにより本社玄関前に座り込む組合員

進む。各事業所の管理体制整備や、近代的な諸規定の制定・整理により、合理的な経営への基盤が確立していくのだが、最大の工ボツクは労使紛争だった。53年に帝国興信所の中で労働組合が結成され、60年までの7年半にわたり紛争が続いた。会社側のロックアウト（事務所の閉鎖）に際しては、信用調査業界初の事態として、新聞各紙でも取り上げられ、第二帝興ビルの前に並ぶビケ隊の様子が報道された。この紛争は、近代的な労使関係を形成する過程での陣痛とも言え、これを乗り越えたことで近代化へのスピードは早められ、その後昭和40年代からの高度経済成長期へと突入する原動力になっていた。

65年、戦後初の大不況「40年不況」に陥ったが、この時期に信用調査業界は「大繁盛時代」を迎えた。60年代半ばには企業倒産が頻発し、興信所は取引先の倒産による被害を最小限にとどめる存在として脚光を浴びることとなったためだ。60年代末

期には社員数も増え、第二帝興ビルでは手狭になり、70年、本社機能は港区・青山の新本社ビルに移された。

第二帝興ビルは、帝国興信所にとって関東大震災、太平洋戦争からの復興のシンボルであった。

地域の記憶の中に残る 在りし日の第二帝興ビル

第二帝興ビルの柱に装飾されたメダリオンには桜をあしらったデザインが施されている。この桜のデザインに関しては、2つの説があり、後藤武夫が好んだ「日本」の象徴として取り入れられたという説と、かつて近くに架かっていた「桜橋」に由来するという説である。帝国興信所の歴史には、このほかにも新富町とのゆかりの深さを結びつける痕跡が数多く残されている。

帝国興信所の2代目所長・後藤武夫は、



第二帝興ビルから見た桜橋 かつては桜橋を都電が通過していた。写真中央の通りは現在の平成通り

社長業に忙殺されながらも、京橋区の区議会議員を5年間務めていた。また、当時本社の近くにあった京橋小学校（92年築地小学校との統合のため移転し、京橋築地小学校として開校）の初代PTA会長も務めていた。

長年、第二帝興ビルの近くで、理髪店を営んできた河井善一さんによると、武夫は出勤前に毎朝、髭剃りのために河井理髪店に通い、当時子供だった河井さんに出張の土産として全国のお菓子を届けたりしていた。

また、戦時中に激しい空襲を受けるようになると、地下室が近所の人たちの避難所として利用されたこともあった。

地域とともに、時代の荒波を乗り越えてきた、このビルの跡地には現在、関連会社帝国データバンクビジネスサービスの本社ビルが建てられ、また新たな歴史を刻み始めている。



京橋小学校での後藤武夫 京橋小学校・幼稚園PTAは、1948年4月に「京橋学園父母と先生の会」の名称で発足し、2代目所長・後藤武夫は初代PTA会長を務めた

大正7年、念願の自社ビル完成 近代的な意匠を施した煉瓦造の本社ビル

右の写真は、1918(大正7)年、京橋区南八丁堀(現・中央区新富)に竣工した帝国興信所本社ビルである。00(明治33)年の創業からこのビルの完成まで帝国興信所は度々拠点を変えていたが、6度目の移転にして初めて自社ビルの建設にいった。清水組(現・清水建設)の設計・施工による同ビルは、煉瓦造の3階建てであった。出入口まわりの装飾は、アーキトレーフ(額縁)とペディメント(三角破風)を一体化した自由なデザインが施され、外壁には通常のものより耐久性のある「鼻黒煉瓦」がびっしりと敷き詰められていた。「新築記念号」と題した同年11月発行の帝国興信所の社内報『脱俗』の中で、創業者・後藤武夫はこのビルについて次のように述べている。

「建物は、外観敢て美を誇るに足らず、規模も亦広壮と称するにあらざるも、華を去り、実に就き、質実堅牢および便利を旨としたる点に於ては、過去十有九年の間に積層したる帝国興信所の信用と、数年前の創立に係る日本魂社の精神とを遺憾なく表現せるもの…」

当時の建築技術を駆使して建てられた本社ビルであったが23(大正12)年9月、関東全域がマグニチュード7.9の激震に襲われると、その衝撃により3階事務所が抜け落ち、2階の天井を打ち抜いて1階の印刷部まで落下。6名が犠牲となり13名の負傷者を出した。建物はその後に発生した火事により全焼している。その経験をもとに、3年後の26年、跡地に耐火・耐震性に優れた鉄筋コンクリート造の新しい本社ビルが建てられた。



史料館 TOPICS

約100年前の全国の企業情報を網羅した 『帝国銀行会社要録』第1版を入手

帝国データバンク史料館は、かねてより収集活動を続けていた1912(大正元)年発行の『帝国銀行会社要録』第1版を入手した。本書は、帝国興信所が集めた企業情報を「設立年」「資本金」「役員名」「事業所」などの項目ごとに掲載している。関東大震災による被害の影響で発行中止となった23年と、戦争により一時休刊となった44～50年を除き、現在でも『帝国データバンク会社年鑑』として毎年刊行しており、2009年11月発行予定のもので第90版を迎える。約100年前の全国の企業情報を網羅した貴重な史料である。



ご利用案内

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

<http://www.tdb-muse.jp/>

開館のご案内

[開館時間] 10:00～16:30(入館は16:00まで) [休館日] 土・日・月曜日および祝日 / 年末年始(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。) [入館料] 無料

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅から徒歩8分 / 中央線 四ツ谷駅四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分 / 都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分 / 丸の内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分



帝国データバンク史料館だより Muse Vol.09 2009年7月発行

<http://www.tdb-muse.jp/>

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL. 03-5919-9600(直通) ※ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。